

【試し読み版】



9

【第VI卷第11章】

【第VI卷】

11

ジンプリチウスと
〈便所紙〉シェルメツサーとの
珍妙な対話

わたしを家に招き入れてくれたとき、すでにほろ酔い加減であった家の主人は、わたしのことをいろいろと詳しく知りたがった。どこから来たのか、これからどこへ行くつもりなのか、仕事は何をしている、云々と。主人はわたしの口から、わたしがこれまでの生涯で経めぐってきた実にたくさん、いろいろな国の名前が出てくるのを聞かされた。モスクワ、タタール、ペルシャ、中国、トルコ、そしてわれらドイツの〈対蹠人〉の国など、そんじよそこらの人間ではなかなか見物できない場所ばかりであるが、これにたいそう驚嘆した主人は、フェルトリンとエツチュ谷⁽¹⁾の上等なワインをわたしにふるまってくれた。

主人のほうはローマやヴェネツィア、ラグーザ⁽²⁾、コンス

タンチノーブル、アレクサンドリアなど、そういう町なら訪ねたことがあると言っていたが、わたしはこれらの土地の定番の風物や習わしをいくつも物語ってみせた。遙か遠くにある国や町についてわたしが大法螺を吹きながらしゃべることを、相手は何もかも信じこむのだった。ちなみにわたしは、かのザムエル・フォン・ゴーラウ(3)の格言詩を念頭においてしゃべったのである。詩人は言っている。

嘘をつきたくば、遠くのことばで嘘をつけ！

自分も味わおうとして、誰がそこまで行くものかい！

この手管がうまく成功しているのを感じたわたしは、物

語の舞台をさらにほとんど全世界へと広げていった。プリ
ニウスの書に言われるところの、かの鬱蒼たる森(4)なるもの
にわたくしは行ったことがありまして、それはかのクテイアクワエ・
クテイリアエ(5)
リア温泉の近くで時おり遭遇することもできると申しませ
が、またもう一度見てみたいと必死になって探しましても、
昼夜を問わずもはやどこでも見つからないそうでございま
す、とか、タタールの地でわたくしはかの愛すべき奇蹟の
植物(6)へ「ボラメツ」を食したことがございます、などと好き
放題にしゃべった。そんな植物など、わたしは今まで一度
も見たことすらなかったのだが、縷々詳しく、その滋味豊
かなる食物の特徴を語っていくと、主人の口のなかは唾液
でいっぱいになってしまふのだった。わたしはこんなふう

に言ったのである。へボラメツの果肉は蟹のよう、色はルビーか赤く熟れた桃のよう、そして香りはメロンにも橙にも似ているのですと。

さらにわたしは、これまでどんな戦場にいたか、いかなる小競り合いや包囲戦を経験したかといったことも話したが、常にいくぶんかの嘘を混ぜこんでおいた。何よりそのほうが主人はうれしそうだったからであり、まるでおとぎ話を聞かされる子どもみたいに、主人はあれやこれやのわたしのでっちあげ話に弄ばれていた。やがて主人は眠りこみ、わたしもお客用にきちんと整えられた寝室に連れていかれた。柔らかなベッドに身を横たえたわたしは、子守り女の手を借りるまでもなくすくと眠りに落ちたのだが、

こんな思いは久しく味わったことがないものだった。

翌朝、わたしは家の人たちよりもずっと早くに目を覚ましたものの、なかなか寢室の外に出られずにいた。さして大きなものではないにしろ、一定の時間このまま抱えつづけているのは難儀としか言いようのない、とある荷物を、できれば放出したかったからである。やがてなんとか壁掛け布の後ろに、世では常づね〈大官房^{カンツェライ}〉と呼ばれている、用足しの場所と思われるところを見つけたが、それはこんな緊急事態のなかで要求してよいものを、遙かに超えるレベルの立派なおトイレであった。わたしは法廷で裁きをうけるがごとくに、大急ぎでそこに座った。そして同時に、こんな見事に飾りつけられた居室といえども、かつてのわ

が高貴なる森の住まいに比べたなら、甚だしく劣るものといわざるをえないと感じていた。なぜならあの森のなかでは、よそ者だろうが家人だろうが関係なく、ちよūd今わたしが堪えなければならなかった種類の気苦勞や切迫感など一切なしに、四方八方どこにでもしやがみこんで、すぐさま用を足せばよかつたからである。

わたしはそんなことにゆつくりと思いをこらし、それから今度は、あの七変化バルトアンダースの教えと技のこと(7)を思い出していたが、ちよūdその時に、すぐ傍らにぶら下げてあつた八つ折り版のノートから、一枚の紙をちぎり取り、この紙への刑を執行しようとしていた。その紙は、他の無数の同胞たちとともに、このトイレの刑を執行され

るべく判決を受け、雁首揃えてここに囚われの身となった紙たちのなかの一枚であった。

「ああ！」と叫んだのは、その一枚の紙であった。「ぼくはこれまで、与えられた仕事を忠実にこなし、ずっと長いあいだ、ありとあらゆる拷問を、避けられぬ身の危険を、労苦と不安、悲惨と悲嘆を耐え忍んできたのに、その報いとしてぼくは、つまりけつきよく、こうしてまた心変わりのはげしい世間から薄っぺらい感謝だけをもらい、それをかみしめているしかないのか！ ああ、こんなことになるなら、いったいどうしてぼくがまだ若いうちに、アトリやウソの鳥たちに喰われてしまって、さっさと鳥糞にでもなっていないなかったのだらう。そうすればすぐさま、大地とい

うぼくの母さんのために自分が役立つこともできた！ ぼくの生まれついで肥やす力で、母さんのために、愛らしい森の小花や薬草を芽生えさせることもできたのに！ こんなしがない流れ者の男のケツを拭いたりして、ぼくの生涯の終末の時を、こんなクソ小屋ですごさなくてもすんだのに！ それにぼくはどうしてフランス王のお手洗いに置かれないのだい。そうすればナバラの王さま(9)がぼくを使つてフランス王のお尻を拭いたろうし、途中で逃げだしたこんな修行僧どのご奉仕するより、そのほうがずっと鼻が高いってもんじゃないか」

わたしは答えた。「その口ぶりからすると、きみはまちがいなく無用の長物のひとつのようだね。ちやうど今から

放りこもうと思つてゐる墓場が、きみにはぴったりさ。こ
ういう臭くてたまらない場所に葬つてくれるのが、王さま
だろうが乞食だろうが、それはどうでもいいことだろう。
もちろん、きみはその場所のことを、どんなガサツで失礼
な呼び方をしたつてかまわないんだが、おれにとつては、
この場所が見つかったことで心底ありがたい気もちだった
わけだ。さてさて、もしきみが自分の潔白無実と、人間族
のために忠実に果たしてきたという仕事のことをいくらか
物語つてみたいと思うなら、今からちよつとやってみたら
どうだい。家の人たちはまだスヤスヤとお休み中だし、こ
っちは喜んで拝聴させてもらうけどね。そして事情によつ
ては、眼前に迫つた消滅、破滅の定めから、きみを救い出

してつてあげてもいいんだぜ」

するとシエルメツサー——それがこの便所紙の名前であつた⁽¹⁰⁾——は、こんな身の上話をはじめた。「わが始祖のもとへ遙かに遡つてまいりますと、プリニウスの証言によれば、その第二〇卷二三章にあるがごとく、とある森のなかにいたそうでございますよ。みずからの土地を所有し、最初の自由を満喫しながら暮らしていた。そしてだんだんと一族を大きくしていったのです。やがて人間族のために、野の植物として奉仕することを強いられ、総称して〈亜麻〉と呼ばれることになりました。この末裔としてぼくが誕生したのはヴェンツェル王の御代のこと。ゴルトシヨイアー村⁽¹³⁾の畑で、種^{たね}として生まれ、しだいに大きな粒となつてい

ったのです。ちなみにこの村は、世界一の亜麻の種が採れると評判です。

さて、種であるぼくの面倒を見てくれた百姓どのは、わが両親の茎からぼくを採取すると、春が近づいてぼくをひとりの商人に売り渡しました。商人はぼくを他の亜麻の種と混ぜ合わせて売りさばき、いくばくかの利益を得ます。

この商人がぼくを売り払った先は近隣の百姓ですが、一セスター⁽¹⁴⁾あたり一グルデン金貨の半分という売上額でした。ぼくたち亜麻の種は、思いがけず値上がりして高級品になったのです。こうしてぼくを最初に売り、最初の利益をあげた育ての親の百姓に次いで、この商人はぼくをもとに利益を出した第二の人間となりました。

さてこの商人からぼくを買い取った次の百姓どのは、ぼくをよく耕された、肥えた畑に投じます。その土のなかでわたしは、馬の糞、豚の糞、牝牛の糞、あるいは他の何か知りませんが、いろんな糞から湧き上がるひどい臭いにまみれながら、やがて朽ちて死にました。しかしこの滅びたぼくから、ぼく自身が誕生し、背が高く颯爽とした亜麻の茎が伸びていきます。時とともにそのような姿へと変身を果たしたぼくは、まさに青春真っ盛りの頃で、自分にもうけて単刀直入、こう言いました。へさあ、今やおれも偉大なる祖先たちと同じように、われらが種族の豊穰と繁栄を世に示す者となるのだ。そして今までの祖先も成し遂げたことがない、史上最高の豊かな実りを産み出してみせよう！

とね。ところがそんな思い上がった望みをいただき、虚栄心に酔っていい気分になっているところへ、とつぜん、畑のそばを通り過ぎる人たちからこんな声が聞こえてきたのです。へ見ろよ、このとんでもなくでかい畑が、絞首台の縄になる草でびっしりだぜ！この言葉は、ぼくと兄弟たちにとつて、まさか絶対に未来の幸いを意味する兆しではないと思われました。なのでその代わりに、誠実な年寄りの百姓たちが、へ見ろや、このとんでもねえ立派な麻を、大したもんじゃねえか！と口ぐちに言っているのを聞いて心を慰めたわけです。

ああ、しかし何ということでしょう。残念ながらぼくたちは、人間たちの欲ばりと憐れむべき窮乏のために、この

ままこの畑のなかで、子々孫々の末代まで繁栄していくことはできない、ということを知らされました。というのも、そろそろ種ができそうだと思っただちようどその時、腕つぶしの強い何人もの男たちがやってきて、ぼくたちを情け容赦なく地面から抜き取ってしまったのです。まるで逮捕された極悪人の一味みたいに、ぼくたちは大きな束にまとめて縛られました。そして男たちはこの仕事によって給料を受けとっていましたから、こうして人間はいつものごとく、ぼくたちを使って利益をあげるわけなので、これで三度目の儲けということになるのでしょうか。

だけど話はまだまだ先があります。ぼくたちの苦しみの道と、人間たちの暴虐とは、ようやく始まったばかりなの

です。由緒ある名高い植物の一族であるのに、そのぼくたちを材料にして、人間はまったくの勝手な（人類の発明品）——世に愛されるビールをその名で呼ぶ人たちも多いですが——をこしらえようとするのですね。つまり、ぼくたちはまず深く掘った溝のなかに引きずられて入り、そこで下に重ねて詰めこまれると、その上から、まるで圧搾機にかけるみたいにくつもの重石を載せられたのです。ここで、この作業をした人間たちに第四の儲けが入ります。

これに続いて、ぼくたちの体が隠れるくらい、溝にたっぷり水が流しこまれます。それでなくてもぼくたちはもうすっかり弱っているのですが、それでもあえてぼくたちを溺死させてしまおうとお考えのようで、まったくたまり

ません。この漬け汁のなかでぼくたちは、もうすでに萎れてはいるにせよ、ぼくたちを飾る葉っぱがすべて腐り、ぼくたち自身がほとんど窒息して事切れるところまで、ずっと寝かされます。この後、まず水を外に流してからぼくたちを担ぎ出し、今度は緑の草地に広がります。ここでぼくたちは太陽の光や、雨や、あるいは風にさらされるわけですが、ぼくたちの憐れむべき悲惨な姿に、心地よい空気も恐れをなし、すっかり己れの様相を変えて、ぼくたちの周りを悪臭でいっぱいにしてしまいます。通りすぎる人たちは必ず鼻をつまんでいくか、少なくとも、へまったく地獄の沙汰だぜなど口ばしるのです。ともあれこの作業でぼくたちの処理をした人たちは、第五の利益を手にすること

ができるわけです。

ぼくたちは草地のうえでしばらくこのままにされるのですが、これは太陽と風とに、ぼくたちの水分を最後の一滴まで抜き取らせ、また雨を加えた三者の協力で、ぼくたちを漂白にかけるのですね。この後、お百姓はぼくたちを麻屋とか麻糸づくりとか呼ばれている人たちに売り渡すわけで、これで六番目の利益ということになりますか。そしてぼくたちとしては、小さな種粒だった時から数えて四人目のご主人にお仕えすることになります。

さて麻屋はぼくたちを納屋にしまいこむと、しばらくそっとしておいてくれます。しばしの休息ですが、それも麻屋が他の用事のために手をとられていて、ぼくたちを今か

らまた苦しめにかかる日雇いの男たちが手配されるまでのことにすぎません。やがて秋がすぎ、あらゆる必要な畑仕事が終わると、ぼくたちは順番に外へ出され、二ダースごとにとまとめて、暖炉の後ろにある小部屋に押しこまれます。ここでぼくたちは〈フランス病〉の発汗治療でもくらうみたいに、とてつもない熱を当てられるのですが、これこそ地獄の苦しみ、地獄の恐怖っていうやつで、ぼくらはそのうち、この建物もろともに燃え上がり、煙となって昇天していくんじゃないか——というか、実際にそんな出来事もよくあったのですが——と、そんなことを何度も思ったものでした。

この熱処理を経たぼくたちは、特上の硫黄マッチなんか

よりももっと火がつきやすくなっています。ここで麻屋は、もっと情け容赦のない死刑執行人にぼくたちを引き渡すのです。この職人はぼくたちをごそつと手づかみで麻打ち機のなかに入れると、何百何千回と打ち刻み、ぼくたちの体内の筋を粉々に砕いていくわけですが、これはもう世間で憎まれた最も凶悪な殺人犯が車裂きの刑にかかった時よりも残酷だったといえましょう。しかもこの後、今度は太い棒のまわりにぼくたちを巻きつけて、力のかぎり床に打ちつけ、ぼくたちの体の壊れた部分がきれいに剝がれて落ちるようにします。この作業をしている死刑執行人の姿は、もはや狂気そのもので、ドクドクと汗シユヅアイスが流れ落ちるばかりか、時にはそれと美しく韻をふむもの——つまりクソシヤイスな

んですけど——までが飛び出すしまつです。さてこの男が、ぼくたちを使って利益を手にした七番目ということになりますね。

この段階で、ぼくたちはこんなことを思っていました。これ以上ぼくたちを苦しめ苛むといつても、さすがにそろそろ創案も尽きただろう、何よりぼくたちは今や完全に分解され、しかも互いに混ぜ合わされ、何もかも一緒くたにされて、もはやどれが自分自身で、どれが仲間なのかかわからない、つまりどの繊維、どの鞣皮も皆一同に声を揃えて、〈ぼくたちは砕かれた亜麻という者でございませう〉とでも唱えるしかない状態だったのですから。

ところがです。次にぼくたちは砧きぬたの上に並べられ、それ

はもうたいへんな力をもつてして、踏みつけ、搗かれ、つぶされ、棹で打たれ、ひと言でいえば粉々に潰され、殴られまくったのです。あたかも〈山の亜麻^{アミアンサス}〉や〈石の亜麻^{アスベスト}〉である石綿か、それとも木綿や絹か、あるいは少なくとも上等な亜麻の糸か、そんなものをぼくたちから作り出そうとしているみたいな作業ではありませんが、こうして麻搗きの男は、この仕事を果たすことによつてぼくやぼくの仲間たちから利益を掬いとつた、八番目の人間となりました。さてさて、この処理を受けたのと同じ日のことですが、しっかりと搗かれ、篩にかけられた亜麻であるぼくは、つづいて何人かの老婆と、その傍らで見習いをする若い娘たち^ちに引き渡されました。そしてこの女たちから、ぼくは今

までに遭遇したなかで最悪の拷問を味わうことになるので
す。女たちは、まずいろいろな形の梳き櫛を使ってぼくを
解剖にかけましたが、それはもう言いようもなくゾツとす
る心地でした。最初に大まかな麻くずが削りとられ、次に
紡ぎ用の麻糸が、そして締めくくりに粗めの麻が取り出さ
れるわけですが、この過程を経て、とうとう最後にぼくは、
美しく上等な麻、最高級の商品だと褒めたたえられる存在
となるのです。

すると今度は、販売用としてきれいに撫でつけられ、箱
に収めて、湿気のある地下室に保管されます。こうするこ
とで手触りがより滑らかになり、さらに重量も増して箔が
付くのですね。こういう次第で、ぼくはあらためてこの場

所でしばらくの休息をもらうことになるのですが、ここまでの、これだけのあまたの苦しみ、悩みを耐え忍んだすえに、今やこうして、あなたがた人間にとって不可欠で有益な素材マテリアへと到達できたことを、ぼくはほんとうに心から喜ばしく思ったものです。

さて、あの女性たちはぼくから利益を手にした九番目の人になるわけですけど、実は、このことはぼくにとって格別の心の慰めであり、またひとつの希望の光をあたえてくれるものでもありました。つまり——そもそも九とは天使の数であり、また最も摩訶不思議な、神秘の数字でもあって、⁽¹⁵⁾その目的地に今やぼくたちはたどり着き、すべてを達成したのですから——、これでもうぼくたちは金輪際、

あらゆる拷問とご縁なしでいられるっていう希望をね。

〔訳註〕

(1) 原(1) フェルトリーンは現イタリア最北端のヴァルテッリーナ、スイスのグラウビュンデン州と接する町。エッチュ谷は現オーストリア南西部、チロル地方のエッチュ川に沿う土地。いずれも南チロル・ワインの銘醸地。

(2) アドリア海東岸にある今日のクロアチアの町ドゥプロブニクを指す。

(3) 『ドイツ語による寸鉄詩三千』(ブレスラウ、一六五四年)というエピグラム詩集を著したザロモン・フォン・ゴーラウ、本名フリードリヒ・フォン・ローガウ(一六〇四—一六五五)を指す。機智と土着性の豊かな言語表現によって十八世紀の作家G・E・レッシングにも高く評価される。グリンメルスハウゼンも早くにこの書物に注目したが、校訂者Breuerによれば、匿名の解読にまでは至らなかつた。ただし匿名であること自体には気づいていて、本作『ジンプリチシムス』の構成との一致から、「ザ

ムエル」という本作の作者の匿名と意図的に重ね合わせたのではと推測される。テクストはローガウの原典と完全には一致しない自由な引用。

(4) プリニウス『博物誌』第二卷九六に、決して一つところに留まらず移動しつづける森の言及がある。

(5) イタリア中部、ローマの北東方向にある町リエーティの近くにかつて存在した湖で、そのなかに浮遊する島があったと言われる。付近で湧き出る鉱泉が名高く、古代ローマ期にはヴェスパシアヌス帝(九―七九)とその息子が訪れた。

(6) 「ボラメツ」についてはV―22章註4を参照。これを食べたことが作り話であるなら、本作V―22章の記述とのあいだに矛盾が生じる。つまり読者は作中での聞き手であるこの主人公と同じ立場に置かれ、テクストの虚構性を常に意識させられることになる。

(7) VI―9章における、黙せる事物と言葉を交わす技についての話を指す。

(8) 全紙(Bogen)一枚の八分の一の大きさ。地域と年代によって差異がある。

(9) ナントの勅令(一五九八年)で知られるフランス王アンリ四世(一五五三—一六一〇)は、その母がイベリア半島のナバラ王国の女王であり、母の死後にまずナバラ王位を継承していた。つまり両国は一体のものであり、ここでフランス王の尻をナバラ王が拭くと言われるのも、同じ人物を二つの名で呼ぶことによる遊戯的表現。またのちのフランス王アンリ四世がパリの宮廷に來た当初に、小姓の卑しい仕事をしなければならなかったことへの皮肉でもある。

(10) 「シエルメッサー」(Schermesser)は基本的に「剃刀」を意味する語であり、なぜトイレ内で使用する紙がこの名で呼ばれるのかは、従来の『ジンプリチシムス』研究の大きな謎の一つである。Vgl. Borgstedt, S. 424. 現代ドイツ語訳版(二〇〇九年)の訳者 R. Raiser は、作者グリーンメルスハウゼンの念頭にもあったはずの当時のことわざに発想の源を求めずすなわち「下男が貴族に成り上がるとき、剃刀(Schermesser)はいちばん鋭く切れる」(I—17章における同種のことわざも参照)という古い慣用表現を踏まえるとき、ここでの便所紙がフランス王に直接仕えるような身分に昇進したがっている姿と重なり合う、というのである。

なお、ここから数頁にわたる一連の主題は紙と製紙の工程であるが、それが麻（亜麻）織物をめぐる話題になっていくのは、製紙原料として木材パルプの利用が一般化する以前、ヨーロッパでは中世から——アラブ世界やアジアに遅れて——亜麻布などの古布が盛んに用いられはじめていたからである。カーランスキー、一一六——一四四頁を参照。また本作を俯瞰するに、冒頭 I—1 章における「亜麻」を用いた「ニセガラス」に始まって、I—10 章・24 章・27 章（「紙の精霊」）・IV—8 章・V—17 章など、〈紙〉の主題が意味深く点在していることは注目に値する。ミユラー、一六〇——一六一頁を参照。

(11) この内容の記述は、実際にはプリニウス『博物誌』第二〇卷の二三章でなく九七章にあるが、作者は依拠したガルゾーニ文献の誤記をそのまま引き継いでいる。

(12) ドイツ王ヴェンツェル（一三六一——一四一九）は神聖ローマ皇帝として一三七八年から一四〇〇年まで在位した。以下に展開するトイレットペーパーの流転の生涯は、十七世紀のウエストファリア条約の締結後あたりまで続くことから、およそ二五〇年から三〇〇年にわたる長大な

期間の物語だということになる。

(13) IV-10章に言及あり。ゴルトシヨイアーの村を含む上部ライン地方は、作者グリーンメルスハウゼンが城守や町の代官を務めた馴染みの場所であり、オーバーキルヒからレンヒエンに至るレンヒタール谷の下流域は亜麻の栽培と加工業が盛んな土地であった。一六六一年には作者が亜麻の競りに加わっていた記録も残っている。十七世紀の実際の土地柄と風土がこの挿話的物語の舞台として用いられている。

(14) 小麦やワインの量を量る古い拵単位で、一セスターはバーデン地域では約一五リットル、ストラスブルでは一六〇一九リットルに相当した。

(15) 天使の九歌隊、十字架上のイエスの死とその後の天変地異の時刻（マタイ27, 46）など、九の数字はキリスト教的な象徴性をもつ。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その⑨

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年四月五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>